

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1270200141		
法人名	社会福祉法人 柚子の会		
事業所名	グループホーム リブ花見川		
所在地	千葉県花見川区花見川3-29-201		
自己評価作成日	令和6年1月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/12/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 NPO共生		
所在地	千葉県習志野市東習志野3-11-15		
訪問調査日	令和6年2月6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員と入居者との関係ではなく、相手の望む関係作りを心掛け、安らぎの中に居心地の良い空間を作り、買い物や散歩に出掛けて地域の方と触れ合い、一日楽しかったと思って頂けるような支援をします。施設は花見川団地の中心の商店街に隣接しており、京成八千代台駅より路線バスが約13分で随時運行し、ご家族の方が訪問に便利です。建物内は広々とした廊下を中心に居室、食堂、談話室があり、フロアでは天候に影響されず適度な運動が可能で、家庭的で暖かみのある落ち着いた雰囲気の中、皆さんゆったりと過ごされています。なお低料金により生活保護の方も入居可能です。また、看取りも行っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

施設は京成電鉄八千代台駅からバスで13分の花見川団地の中央部に立地している。バス便が多く、近隣には交番、スーパー、コミュニティセンター、公園などがあり、訪問や日常生活に便利である。建物内は広くて長い廊下があり、天候に影響されず適度な運動ができる歩行訓練通路になっている。家庭的な雰囲気の中で、利用者本位のサービスを行っている。利用者調査でも感謝の言葉が多く、改善すべき点は全くなかった。利用者で買い物に出かけられる方は、職員と一緒に近隣のスーパーまで食料の買い出しに行ったり、食事の手伝いをする際に、利用者の能力を引き出し自覚を促すことを目指している。利用者の半数以上が生活保護者であるため、市の担当者とは電話などで連絡を取り合ったり、担当者が訪れて利用者に話しかけたりしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目			
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	会議や申し送りにて常に共有している	法人の理念である「QOLを基盤とした尊厳と自立の確立」を施設内に掲示し、ユニット会議や申し送り時に唱和し、利用者の意見を聞きながら対応しており、尊厳を守っている。例えば、下膳や洗い物を自分でやりたい利用者には自分でやってもらい、達成感を味わってもらっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で外出を控えていたが、徐々にお花見や散歩を行っており、地域とのつながりを持っている。	コロナの緩和に伴い、ホーム周辺での散歩が可能になってきた。近隣のスーパーで食料の買い出しを一緒に行ったり、商店街周辺で散歩を楽しむことができている。冬場は寒さのため外出が難しかったが、暖かくなったら近隣のお花見も検討中である。ボランティア団体が訪れ、大正琴演奏やクリスマスイベントを共に楽しんだ。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域交流に努めているが、実際、認知症がどこまで理解されているかはわからない		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	管理者が行っている。職員は周知している	コロナ禍で書面開催をしていた運営推進会議も12月から対面での会議になり、3月には4回目を迎える。メンバーは、団地の会長、民生委員、安心ケアセンター及び家族等である。会議の中で、他のGHで重度の方が入浴時に車椅子を乗り損ねて転倒したため、2人介助が必要であると注意を促す場面があった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者が市担当者と利用者の件で報告や相談をしている	市に対しては、生活保護者が利用者の半数以上いるために、社会援護課へ申請支援を行いに行ったり、電話で相談したりしている。市の担当者が訪れ、利用者に話しかけたり、職員に状態を聞いたりもしている。安心ケアセンターとは、電話で空き室状況に対しての情報を共有している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在、身体拘束は行っていないが状況によってはご家族の理解の下、可能性は否めない	身体拘束廃止委員会は、2人の管理者と各ユニットの担当で年に4回実施し、パソコンから身体拘束に関する資料を抽出し、研修を行っている。具体例としては、スピーチロックは行動意欲の低下につながり、ADLも低下する可能性がある。また、介護の質にも影響を及ぼすため、意識して徹底することが重要である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修やご家族、職員に対しての環境やメンタルケアにも気を付ける		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学ぶ機会が無く、制度を知っている職員も少ない。今後は制度を理解した上で支援して行きたい		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	その都度、管理者が十分な説明を行っている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的に運営推進会議を開催している。会議で出た意見や要望は、今後の運営に反映させている	家族からの意見や要望は、面会時や差し入れを持ってきた際に、利用者の現況を詳しく話すことで得られる。例えば、洋服が古くなったり小さくなった場合、面会時に持ってくるか、来れない場合は購入してくださいと言った返事が返ってくる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニットごとの会議で話し合い、反映、改善している	職員からの意見や提案は業務中が一番多く、例えば、トイレトーパーを多量に使うため、何個か置いておくとう用途に使われてしまうことがある。そのため、本人に渡して量を確認したらどうかという提案が出たり、非常口の階段が狭いため、車椅子の方の避難誘導についてどう対応すべきかといった意見も出る。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	従事者それぞれが向上心を持ち、意見、行動ができる様な環境に努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外研修や資格取得の機会を積極的に設けている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流はほとんど無い。今後、勉強会も含めて行っていきたいと思う		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の状態を把握して本人が安心して生活できるような情報集め支援に努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族との話し合いの中でご家族の思い、不安を聞き、信頼関係を築ける様、支援に努めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と接し家族との話し合いの中で困っている事や、要望などを何が必要か見極めて、把握しサービスに努めている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の能力に合わせ、できる事は一緒にやっていたく		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の様子、状態を定期的に写真や手紙に書き送付したり、電話にて伝えている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の為、外部との交流は難しいが、思い出話をしたり、傾聴等で利用者との交流を大切にしている	外出はあまり行われず、家族と通院帰りに外食をしたり、美容院へ行く程度である。車椅子の方も職員が押して、たまに散歩をすることがあるが、玄関先で日向ぼっこをすることが多い。昔話で野球の話になると、以前の選手のファンだったことや今の太谷選手の活躍について話が弾んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの認知度、状態を見極め、互いに助け合ったり話が出来る様に支援している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用後家族が気軽に相談できるような環境作りに努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の話をお聞きし、出来るだけ希望に沿った生活が過ごせるように支援している	何気ない話の中から、或いは本人の経歴からその人の得意とするものを引き出すように心掛けている。野球の好きな人には、テレビで野球をやっていたら見せてあげる。出てきた選手で、この選手は千葉県の出身だよ、と話すと、私は〇〇県の出身だよと経歴を話してくれ、次の話題へと自然な形で繋がっている。料理屋に努めていたことのある人に、食事時に手伝ってもらおうと本人は生き生きとした表情になる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、または家族より生活環境を聞き、それに近い生活が出来る様に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの身体、精神状況を一日過ごした内容を記録に残し全職員が把握できるようにしている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	安心した生活が送れるようにご本人、ご家族、関係者を含め話し合いを持ち、計画作成をしている	身体状況の変化が見られる際、ケアプランの見直しを行う前に、まず家族に電話で変更を確認し家族からの要望を組み入れるよう心掛けている。例えば、体を動かしてほしいとの要望や、本人が洗濯物のたたむ作業を希望する場合は、それを尊重しプランに反映させている。最終的にはケアプランの作成が終わった後、家族に送って確認を頂く形を取っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録、申し送りノートに記入し、情報を共有している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の希望によりその時々ニーズに対応出来る様臨機応変に取り組んでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在地域との交流は、徐々にだが出来ている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	昨年12月から主治医が決まり、統一の医療が行われている	提携医による月2回の訪問診療が行われており、利用者は定期的に診察を受けている。2ユニットを診てもらっているため、ほぼ毎週主治医が診療に来ていて、別のユニットの利用者でも調子が悪い場合は、訪問時に診察を受けることができる。提携医の主治医が12月から決まったことで、統一された医療となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	昨年より訪問看護が週一で入り、日常の情報共有に努め緊急時の対応も行っている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	面会に行った時には医師等に状態を聞き、医師、家族とのカンファレンスには必ず同席させて頂き、協力し合える環境づくりに努めている		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化になってきた時点で医師、家族、職員を交え今後の保身、希望、施設で提供可能なこと、またできない事を明確にし家族の希望に沿えるよう努めている	今年度、4件の看取りが行われた。入居時に看取りに関する要望を聞くが、体の状況変化があった時に家族とどのように対応するかを改めて確認している。食事の量が減ってきた時点で重度化のポイントとして捉え、主治医と相談し、主治医から家族に説明を行っている。家族との対応が決まった後、主治医の指示のもとにホーム内での看取り介護が行われることになる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応は、利用者、職員ともに避難訓練時に行い備えている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を行い、避難経路の確認や利用者が避難出来る様、全職員に指導している。	11月には夜間想定で自主訓練が行われ、3月には隣接のデイサービスと合同で日中想定避難訓練が実施された。デイサービスと事前に打ち合わせを行い、1次避難場所としてデイサービス前広場が指定された。災害対策は災害対策マニュアルに基づいて、職員各々の役割分担が適切になされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に利用者を敬う気持ちを忘れず、プライドを傷つけないよう、言葉掛けに配慮し対応している	粗相をした際など、他人の目につかないように何気なく「着替えに行きましょうか」と気配りしている。利用者は人生の先輩であることを意識し、言葉遣いに注意し敬語を使って接している。呼びかけでは、「さん」付けを基本とし、人によっては孫からよく言われていた「バアバ」と呼ばれた方が通り易いのであれば「バアバ」と呼ぶことにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	話の中で希望、要望を伺い自己決定できるように促す		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々のペースに合わせ、常に臨機応変に対応出来る様努めている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔、整容に気を付け個人の趣味などに対応している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	感染症の流行より、買い物には一緒に出掛けることはできないが職員が毎回手作りで料理を提供している。食後は一緒に後片付けを行っている	コロナの制限が緩和され、買物に出られる方は近隣のスーパーまで一緒に食料の買い出しに行けるようになった。食事のお手伝いをする際に、利用者の持っている能力を引き出し、自覚を促すことを目指すようにしている。月に1回、行事食の機会を設け、季節に合わせた、例えば1月はおせち料理、3月にはちらし寿司などを提供するように努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量や水分摂取量をチェックし、利用者の状態を把握し支援している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯、口腔内の清潔を保つように個人に合わせてケアを行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを職員全員で把握し個人の能力にあった支援を行う。自立支援をしている	トイレで用をたすことが、利用者にとって当たり前の生活であることを感じ取ってもらうことを重視している。重度化している方が多い中で、個人の状況に合わせて声掛けや寄り添ったトイレ誘導を心掛けている。このため、職員は個人ごとの排泄記録をもとに、トイレ誘導を実施するようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者の排泄記録を下に食事のバランス水分量など個々の便秘予防に取り組んでいる		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回の入浴を基本として、体調や希望に合わせて入浴している。年々重度化して来る利用者に対しても、気持ち良く入浴して頂ける様に新たな入浴設備の導入を考えている。	常に一番風呂に入ることをこだわりとする方に対して、それに応えるための入浴支援を行っている。重度化されている利用者が多いため、リクライニングのイスを使用して寝たきりの方でも入浴できるよう工夫している。時には、温泉気分を味わってもらうために入浴剤を使用することもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の身体の状態に合わせ横になる時間を設けるなどして安心して気持ちよく過ごして頂けるよう支援している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の薬の効能知り、変化があった時は主治医に報告、連絡をし、指示を仰いでいる		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食後の食器拭きや洗濯物を畳んで頂く等、無理をしない範囲で出来る方に行っている。また気分転換に他棟へ散歩に行っている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症の流行により、散歩程度の外出を行っている	コロナの緩和に伴い、ホーム周辺での散歩が可能になってきた。近隣のスーパーで食料の買い出しを一緒に行ったり、商店街周辺で散歩を楽しむことができている。冬場は寒さのため外出が難しかったが、暖かくなったら近隣のお花見も検討中である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は基本施設で管理を行い、利用者や家族の希望に応じて使えるように支援している		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	認知症があるので利用者では難しいが職員が電話や手紙で状況を報告している		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を取り入れて季節の飾りつけや花や緑を飾り明るい空間にて過ごして頂く	安全面からもスペースを広く取り、動線を考慮したイスやテーブルの配置に気を付けている。また、パソコンを活用して、季節に応じた絵をプリントアウトして壁に貼ったり、家族が持ってきてくれたお花を飾ったりと、季節感を失わないように工夫している。ホームの広い廊下を活用して、利用者の歩行練習も行われている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	安全面に考慮し椅子やテーブルを配置して気分により場所を変えて過ごせる様に対応している		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご自分の居心地良い部屋作りをして頂きたく今まで使用されていた品をお持ちいただいている	入居前の環境と違う居所でも、自分の使い慣れた物があることを確認することで、利用者が安心感を抱くことが多い。そのため、桐のタンス、仏壇、家族の写真などが持ち込まれ、居室に配置されている。職員との会話の中で、写真を見て「これ家のお父さんよ」という一言から、昔の思い出を引き出すきっかけもなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室内の動線を確保し、安全に過ごせるよう配置している。また、目印になるようにラベルなどを使い自立した生活が出来る様工夫している		